

日蓮大聖人御書全集

にちみようしようにんごしよ

日妙聖人御書

新版
1678
S
1683

にちみようしようにんごしよ

日妙聖人御書

ぶんえい ねん

文永9年(72)

がつ ちち

5月25日

さい にちみよう

51歳 日妙

かこ ぎようぼうぼんじ もう もの じゆうにねん あいだ おお くに

過去に樂法梵志と申す者ありき。十二年の間、多くの国

巡 によらい きようほう もと とき ぶつ ぼう そう さんぼう

をめぐりて如来の教法を求む。時にすべて仏・法・僧の三宝

ひと ぼんじ こころ かつ みず 求 う じき

一つもなし。この梵志の意は、渴して水をもとめ飢えて食

ぶつほう たず たま

をもとむるがごとく仏法を尋ね給いき。

とき ばらもん もと い われ しょうぎよう いちげたも

時に婆羅門あり。求めて云わく「我、聖教を一偈持て

まこと ぶつほう ねが まさ 与 ぼんじこた い

り。もし実に仏法を願わば当にあたらうべし」。梵志答えて云

ばらもん い まこと こころざし

わく「しかなり」。婆羅門の云わく「実に 志 あらば、皮

かわ

剥かみ 紙かみ とし、骨ほね をくだいて筆ふで とし、髓ずい をくだいて墨すみ と

し、血ち をいだして水みず として書か かんい と云い わば、仏ほとけ の偈げ を説と か

ん」。時とき にこの梵志ぼんじ、悦よろこ びをなして、彼かれ が申もう すごとくして、

皮かわ をはいでほして紙かみ とし、乃至ないしいちごん 一言違 をもたがえず。時とき に婆羅

門もん、忽然こつねん として失う せぬ。この梵志ぼんじ、天てん にあおぎ、地ち にふす。

仏陀ぶつだ これを感じかん じて下方かほう より涌わ き出い でて説と いて云のたま わく「如法によほう

応おうしゆぎよう 修行ひほう 非法ふ 不お 応うぎよう 行こんぜ 。今世ぎよう 若ほう 後世しやあん、行に 法よほう 者ん 安によほう 穩ん (如法によほう を

ばまさ 応しゆぎよう に修行ひほう すべし。非法まさ をばぎよう 応ひほう に行まさ ずべからず。今世こんぜ も

しご は後世ぜ、法ほう を行ぎよう ずる者もの は安あん 穩のん なり) 等とううんぬん 云々ん。この梵志ぼんじ、

しゆゆ ほとけ 成

にじゅうじ

須臾に仏になる。これは二十字なり。

むかし しゃかぼさつ てんりんおう

とき ぶしようちようし しめついらく

昔、釈迦菩薩、転輪王たりし時、「夫生輒死。此滅為楽

そ う すなわ し めつ らく はちじ

(夫れ、生まれて輒ち死す。この滅を楽となす)の八字を

たつと たも ゆえ み 替 せんとう 点 はちじ

尊び給う故に、身をかえて千灯にともして、この八字を

くよう たま ひと 勸 せきへき ようろ 書 付 み ひと

供養し給い、人をすすめて石壁・要路にかきつけて、見る人

ぼだいしん 発 こうみよう とうりてん いた てん

をして菩提心をおこさしむ。この光明、切利天に至る。天

たいしやく しょうてん ともしび たま

の帝釈ならびに諸天の灯となり給いき。

むかし しゃかぼさつ ぶつぼう もと たま らいにん ひと

昔、釈迦菩薩、仏法を求め給いき。癩人あり。この人に

向 われ しょうほう たも じにじゅう わ らいびよう

むかつて「我、正法を持てり。その字二十なり。我が癩病

摩

抱

舐

ひ

りょうさんきん

にく

与

と

をさすり、いだし、ねぶり、日に両三斤の肉をあたえば説

い

かれ

もう

にじゅうじ

え

ほとけ

くべし」と云う。彼が申すごとくして、二十字を得て仏に

成

たも

によらいしやうねはん

ようだんおしやうじ

にやくうししん

なり給う。いわゆる「如来証涅槃、永断於生死。若有至心

ちやう

とうとくむりやうらく

によらい

ねはん

しやう

なが

しやうじ

だん

聴、当得無量楽（如来は涅槃を証し、永く生死を断じた

ししん

き

まさ

むりやう

らく

う

もう。もし至心に聴くことあらば、当に無量の楽を得べし」

とううんぬん

等云々。

むかし

せつせんどうじ

もう

ひと

せつせん

もう

やま

げどう

昔、雪山童子と申す人ありき。雪山と申す山にして外道

ほう

つうだつ

ぶつぼう

聞

とき

だいきじん

の法を通達せしかども、いまだ仏法をきかず。時に大鬼神あ

と

い

しよぎやうむじやう

ぜしやうめつぼう

しよぎやう

むじやう

りき。説いて云わく「諸行無常。是生滅法（諸行は無常

しょうめつ

ほう

とううんぬん

はちじ

と

なり。これ生滅の法なり」等云々。ただ八字ばかりを説い

あと

説

とき

せつせんどうじ

はちじ

得

よろこ

極

て後をとかず。時に雪山童子、この八字をえて悦びきわま

なか

によいしゆ

得

はな咲

りなけれども、半ばなる如意珠をえたるがごとく、花さき

み生

似

のこ

はちじ

聞

もう

とき

て菓ならざるにいたり。残りの八字をきかんと申す。時に

だいきじんい

われ

すうじつ

あいだききん

しょうねん

みだ

大鬼神云わく「我、数日が間飢饉して正念を乱る。ゆえ

あと

はちじ

説

じき

与

うんぬん

とき

どうじ

に、後の八字をときがたし。食をあたえよ」と云々。時に童子

と

い

じき

きこた

い

われ

問うて云わく「なにをか食とする」。鬼答えて云わく「我は

ひと

温

けつにく

われ

ひぎようじざい

しゆゆ

あいだ

人のあたたかなる血肉なり。我、飛行自在にして、須臾の間

してんげ

まわ

尋

けつにくえ

に四天下を廻りたずぬれども、あたたかなる血肉得がたし。

ひと てんまも たも ゆえ とが さつがい 難

人をば天守り給う故に、失なければ、殺害することかたし

とううんぬん どうじい わ み ふせ か はちじ なら った

等云々。童子云わく「我が身を布施として彼の八字を習い伝

うんぬん きじんい ちえ かしこ われ 賺

えん」と云々。鬼神云わく「智慧はなはだ賢し。我をやすか

どうじこた い がいやく きんぎん 替

さんずらん」。童子答えて云わく「瓦礫に金銀をかえんにこ

替 われ やま し

れをかえざるべしや。我いたずらにこの山にして死しなば、

しきよう ころう く いちぶん くだく あと はちじ 替

鷗鳥・虎狼に食われて一分の功德なかるべし。後の八字にか

ふん ほん きい われ しん

えなば、糞を飯にかうるがごとし」。鬼云わく「我いまだ信

どうじい しょうにん かこ ほとけ 立 たま だいぼん

ぜず」。童子云わく「証人あり。過去の仏もたて給いし大梵

てんのう しゃくだいかんいん にちがつ してん しょうにん 立 たも

天王・釈提桓因・日月・四天も証人にたち給うべし」。こ

きじん

あと

げ

説

もう

どうじ

み

着

しか

の鬼神、「後の偈をとかん」と申す。童子、身にきたる鹿の

かわ

脱

ざ

敷

こき

がつしよう

ざ

着

たま

皮をぬいで座にしき、踞跪・合掌して「この座につき給え」

しょう

だいきじん

ざ

着

と

い

しょうめつめつ

と請ず。大鬼神、この座について説いて云わく「生滅滅已、

じゃくめついらく しょうめつめつ

お

じゃくめつ

ちやく

とううんぬん

寂滅為楽（生滅滅し已わつて、寂滅を楽となす）」等云々。

げ なら がく

き

いしとう

か

つ

この偈を習い学して、もしは木、もしは石等に書き付けて、

み だいきじん

くち

投

入

たも

か

どうじ

いま

しゃくそん

か

身を大鬼神の口になげいれ給う。彼の童子は今の釈尊、彼

きじん

いま

たいしゃく

の鬼神は今の帝釈なり。

やくおうぼさつ

ほけきょう

みまえ

ひじ

しちまんにせんさい

あいだ

点

薬王菩薩は、法華経の御前に臂を七万二千歳が間ともし

たま

ふきようぼさつ

たねん

あいだ

にじゅうしじ

むりようむへん

給い、不軽菩薩は、多年が間、二十四字のゆえに無量無辺

の四衆ししゆうに「罵詈毀辱」杖木・瓦礫而打擲之めりきにく じようぼく がりやくに ちようちやくし じようぼく がりやく（杖木・瓦礫

もて、これを打擲す）せられ給いきちようちやくく たま。いわゆる二十四字にじゆうしじ

と申すは、「我深敬汝等、不敢輕慢。所以者何、汝等皆行もう が じんきようによとう ふかんきようまん しよいしやが によとうかいぎよう

菩薩道、当得作仏（我は深く汝等を敬い、あえて輕慢せぼさつどう とうとくさぶつ われ ふか なんだち うやま きようまん

ず。所以はいかん、汝等は皆菩薩の道を行じて、当に作仏ゆえん なんだち みなぼさつ どう ぎよう まさ さぶつ

することを得べければなり）等云々。かの不輕菩薩は今のう どううんぬん ふきようぼさつ いま

教主きようしゆうしゆしやくそん釈尊むかしなり。昔す ずだんのうの須頭檀王みようほうれんげきよう ごじは、妙法蓮華經せんざい あいだ あしせんじん 責 使の五字み とこの

ために、千歳が間、阿私仙人にせめつかわれ、身を床となせんざい あいだ あしせんじん 責 使

させ給たまいて今いまの釈尊しやくそんとなり給たまう。

みようほうれんげきよう　はちかん　はちかん　よ　じゅうろくかん

しかるに、妙法蓮華経は八卷なり。八卷を読めば十六卷

よ　しゃか　たほう　にぶつ　きよう　ゆえ　じゅうろくかん

を読むなるべし、釈迦・多宝の二仏の経なる故。十六卷は

むりようむへん　かんじく　じつぼう　しよぶつ　しやうみよう　ゆえ　いちじ

無量無辺の巻軸なり、十方の諸仏の証明ある故に。一字は

にじ　しゃか　たほう　にぶつ　じ　ゆえ　いちじ　むりよう　じ

二字なり、釈迦・多宝の二仏の字なる故。一字は無量の字な

じつぼう　しよぶつ　しやうみよう　おんきよう　ゆえ　たと　によいほうじゆ

り、十方の諸仏の証明の御経なる故に。譬えば、如意宝珠

たま　いつしゆ　にしゆ　ないしむりようしゆ　たから　降

の玉は、一珠なれども、二珠、乃至無量珠の財をふらすこ

同　ほけきよう　もんじ　いちじ　ひと　たから　むりよう

と、これおなじ。法華経の文字は、一字は一つの宝、無量

じ　むりよう　ほうしゆ　みよう　いちじ　ふた　した

の字は無量の宝珠なり。妙の一字には二つの舌まします。

しゃか　たほう　おんした　にぶつ　おんした　はちよう　れんげ

釈迦・多宝の御舌なり。この二仏の御舌は八葉の蓮華なり。

この重なる蓮華の上に宝珠あり。妙の一字なり。

この妙の珠は、昔、釈迦如来の、檀波羅蜜と申して、身

をうえたる虎にかいし功德、鳩にかえし功德、尸羅波羅蜜と

申して、須陀摩王としてそらごとせざりし功德等、忍辱仙人

として歌梨王に身をまかせし功德、能施太子、尚闍梨仙人等

の六度の功德を、妙の一字におさめ給いて、末代悪世の我

ら衆生に、一善も修せざれども六度万行を満足する功德

をあたえ給う。「今この三界は、皆これ我が有なり。その中

の衆生は、ことごとくこれ吾が子なり」、これなり。我ら具縛

ぼんぷ

きようしゆしやくそん

くどく 等

か くどく

の凡夫、たちまちに教主釈尊と功德ひとし。彼の功德を

ぜんたい受

取 ゆえ

きよう

い

わ

ひと

こと

全体うけとる故なり。経に云わく「我がごとく等しくして異

とうんぬん

ほけきよう

こころう

もの

しやくそん

さいとう

なることなし」等云々。法華経を心得る者は釈尊と齊等な

もう

もん

りと申す文なり。

たと

ふぼわごう

こ

産

こ

み

ぜんたいふぼ

み

譬えば、父母和合して子をうむ。子の身は全体父母の身な

たれ

あらそ

ごおう

こ

ごおう

しし

り。誰かこれを諍うべき。牛王の子は牛王なり。いまだ師子

おう

ししおう

こ

ししおう

にんのう

てんのう

王とならず。師子王の子は師子王となる。いまだ人王・天王

とう

いま

ほけきよう

ぎようじや

なか

しゆじよう

等とならず。今、法華経の行者は、「その中の衆生は、こ

わ こ

もう

きようしゆしやくそん

み こ

とごとくこれ吾が子なり」と申して教主釈尊の御子なり。

きようしゆしやくそん

ほうおう

かた

教主釈尊のごとく法王とならんこと難かるべからず。

ふこう

もの

ふぼ

あと

継

きようおう

たんしゆ

ただし、不孝の者は父母の跡をつがず。堯王には丹朱と

たいし

しゆんおう

しやうきん

もう

おうじ

ににんとも

いう太子あり。舜王には商均と申す王子あり。二人共に

ふこう

もの

ちち

おう

捨

げんしん

たみ

ちやうか

不孝の者なれば、父の王にすてられて現身に民となる。重華

う

とも

たみ

こ

こうよう

こころ

深

きやう

と禹とは共に民の子なり。孝養の心ふかかりしかば、堯・

しゆん

におうめ

くわい

讓

たま

たみ

み

舜の二王召して位をゆずり給いき。民の身、たちまちに

ぎよくたい

たま

たみ

げんしん

おう

ほんぷ

玉体にならせ給いき。民の現身に王となると、凡夫のたち

ほとけ

おな

いちねんさんぜん

かんじん

まちに仏となると、同じことなるべし。一念三千の肝心と

せう

申すはこれなり。

至 でんぎよう ごにつとう にねん はとうさんぜんり 隔

いたれり。 伝教、御入唐ただ二年なり、波濤三千里をへだ

なんし じようこ けんじん しようにん

てたり。これらは男子なり、上古なり、賢人なり、聖人な

聞 によにん ぶつぼう 求 せんり みち 分

り。いまだきかず、女人の仏法をもとめて千里の路をわけ

りゆうによ そくしんじようぶつ まかはじゃはだいびくに きべつ

しことを。竜女が即身成仏も、摩訶波闍波提比丘尼の記別

与 知 ごんげ ざいせ

にあずかりしも、しらず、権化にやありけん。また在世の

ことなり。

なんし によにん しよう もと わか ひ 温

男子・女人、その性、本より別れたり。火はあたたか

みず 冷 あま うお 獲 巧 やまがつ しか

水はつめたし。海人は魚をとるにたくみなり。山人は鹿を

賢 によにん いんじ きようもん 明

とるにかしこし。女人は姪事にかしこしとこそ経文にはあ

そらうら

聞

ぶつぼう

によにん

かされて候え。いまだきかず、仏法にかしこしとは。女人

こころ

せいふう

たと

かせ

繫

取

の心を清風に譬えたり。風はつなぐとも、とりがたきは

によにん

こころ

によにん

こころ

みず

描

たと

みなも

女人の心なり。女人の心をば水にえがくに譬えたり。水面

もんじ

留

によにん

おうにん

譬

には文字とどまらざるゆえなり。女人をば誑人にたとえた

とき

じつ

とき

こ

によにん

かわ

たと

り。ある時は実なり、ある時は虚なり。女人をば河に譬え

いつさい

曲

たり。一切まがられるゆえなり。

ほけきよう

しょうじき

ほうべん

す

とう

みな

しんじつ

しかるに、法華経は「正直に方便を捨つ」等、「皆これ真実

とう

しちじき

こころじゆうなん

とう

にゆうわしちじき

もの

なり」等、「質直にして意柔軟なり」等、「柔和質直なる者」

とう

もつ

しょうじき

ゆみ

げん

張

すみ

等と申して、正直なること弓の絃のはれるごとく、墨の

繩 打

もの しん

おんきよう

ふん

なわをうつがごとくなる者の信じまいらす御経なり。糞

せんだん

もう

せんだん

か

もうご

もの

ふもうご

もう

を梅檀と申すとも、梅檀の香なし。妄語の者を不妄語と申す

ふもうご

いつさいきよう

みな

ほとけ

こんく

せつ

とも、不妄語にはあらず。一切経は皆、仏の金口の説、

ふもうご

みこと

ほけきよう

たい

不妄語の御言なり。しかれども、法華経に對しまいらすれ

もうご

きご

あつく

りようぜつ

ば、妄語のごとし、綺語のごとし、悪口のごとし、両舌の

おんきよう

じつご

なか

じつご

そうら

じつご

ごとし。この御経こそ実語の中の実語にて候え。実語の

おんきよう

しょうじき

もの

こころえそうろう

いま

じつご

によにん

御経をば、正直の者、心得候なり。今、実語の女人に

ておわすか。

まさ

し

しゆみせん

頂

たいかい

渡

ひと

当に知るべし、須弥山をいただきて大海をわたる人をば

見るとも、この女人をば見るべからず。砂をむして飯とな

み によにん みに によにん みに によにん みに によにん みに によにん

す人をば見るとも、この女人をば見るべからず。当に知る

ひと みに によにん みに によにん みに によにん みに によにん

べし、釈迦仏・多宝仏・十方分身の諸仏、上行・無辺行等

しゃかぶつ たほうぶつ じつぼうふんじん しょうぶつ じょうぎよう むへんぎようとう

の大菩薩、大梵天王・帝釈・四王等、この女人をば、影の

み 添 守 たも によにん かげ

身にそうがごとくまぼり給うらん。日本第一の法華経の

ぎようじや によにん ゆえ な ひと 付 にほんだいいち ほけきよう ふきよう

行者の女人なり。故に、名を一つつけたてまつりて、不軽

ぼさつ ぎぎ 擬 にちみようしようにんとううんぬん

菩薩の義になぞらえん。日妙聖人等云々。

そうしゅうかまくら ほつこくさどのくに ちゅうかんいつせんより およ

相州鎌倉より北国佐渡国、その中間一千余里に及べり。

さんかい 隔 やま が が うみ とうとう ふうう とき 従

山海はるかにへだて、山は峨々、海は濤々、風雨、時にしたが

さんぞく かいぞくじゅうまん

宿 々

泊

々

うことなし。山賊・海賊充滿せり。すすく、とまりとまり、

たみ ところ

いぬ

げんしん

さんあくどう

く

経

民の心、虎のごとし、犬のごとし。現身に三悪道の苦をふ

うえ とうせい らんせ こそ

むほん

ものくに

じゅうまん

るか。その上、当世の乱世、去年より謀叛の者国に充滿し、

ことしにがつじゅういちにかつせん

いまががつ

末

せけん

今年二月十一日合戦。それより今五月のすえ、いまだ世間

あんのん

ひと

おさなご

預

ちち

安穩ならず。しかれども、一りの幼子あり。あずくべき父も

頼

りべつ

ひさ

たのもしからず。離別すでに久し。

ふで

およ

こころわきま

止

お

かたがた筆も及ばず、心弁えがたければ、とどめ畢わ

んぬ。

ぶんえいくねんたいさいみずのえさるごがつにじゅうごにち

にちれん

かおう

文永九年太歳壬申五月二十五日

日蓮

花押

にちみようしようにん
日妙聖人